

大学生の回想する児童期の家庭における食事場面と 現在の性格特性との関連

恩村, 咲希
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/26140>

出版情報：九州大学心理学研究. 14, pp.107-115, 2013-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



大学生の回想する児童期の家庭における食事場面と現在の性格特性との関連

恩村 咲希 九州大学大学院人間環境学府

Relationship between Childhood Meal Scenes at Home Remembered by University Students and their Current Personality

Onmura Saki (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This study examines the relationship between childhood meal scenes at home that are remembered by university students and their current personality. The meal scenes are analyzed in terms of companions, conversation content, conversation frequency, atmosphere, and consideration of meals.

The scale of the conversation content in childhood meal scenes was prepared on the basis of the results of a preliminary survey. The result showed that a relationship was found between personality traits and conversation content such as “discussions about daily event”, conversation frequency, atmosphere, and consideration of meals. As a result of the classification of meal scenes into five types, differences were seen in “Extraversion,” “Openness to experience,” “Agreeableness,” and “Conscientiousness.” These results showed that meal scenes are important not only for the physical but also for psychological aspects of one’s personality.

Key Words: childhood, meal scene, personality

I 問題と目的

1. 食事場面

食事は生涯繰り返される営みであり、人間にとって食は単なる栄養摂取ではなく、対人関係を築き、深める上で有用なコミュニケーションツールの一つである（後藤ら, 2009）。飯塚・松川（2008）が大学生を対象に行った調査では、自分にとって食事とは何か（意味）について、栄養補給、健康維持といった生理的な要因をあげるほか、楽しみ、コミュニケーションの場、落ち着ける時間といった精神的機能面をあげて食事を位置づける回答が多くみられた。このように、食事は心理的・社会的な意味合いも持つものである。

辻本・奥田（2009）は、楽しく食べることは生活の質（QOL）の向上や、身体的・精神的・社会的健康につながるものであると述べている。また生野（2001）は、摂食障害の症状が見られる子どもは家族関係の問題を抱えており、家族ととる食事状況における、栄養的配慮や嗜好など生理的な部分、しつけやマナーなど社会的な部分、相互交流や雰囲気などの情緒的な部分のアンバランスさ、特に強制的なしつけや情緒的側面が狭小になることに原因があると推察している。このように、食事場面では食事内容だけではなく、コミュニケーションや雰囲気といった要素が心理的側面に大きく影響していると考えられる。さらに、梅澤ら（2010）が細やかな気配りや食事をする環境への配慮が性格傾向に影響していると推察しているように、食事への配慮もまた心理的側面と関

わりが強いと考えられる。

2. 児童期の家庭における食事場面

現在では生活様式の多様化が急速に進み、食事の場を介した人と人とのあたたかな交流の希薄さが指摘されるようになってきた（飯塚・松川, 2008）。食事形態の変容で孤食や個食が増加していることも家族内で交流が不十分であることの表れであるといえるだろう。

児童期になり、共同生活へ参加するようになると、家族での食事を離れ、給食などによって社会のより広い共同性やルールを身につけることが要求される。そのため、家庭での食卓で安心感や満足感を体験できることが児童の社会的発達に重要となってくる（後藤ら, 2009）。大谷ら（2003）も、幼少期の家庭を中心とした取り組みが、その時期の子どもの発達だけでなく、後の子どもの心理的な発達に関連していると述べており、家庭で体験する食事場面がどのようなものであるのかによって、その後の人格形成やコミュニケーション能力の形成、情緒的な安定性といった心理的側面の発達も変化しうると考えられる。

3. 性格特性

日常生活の様々な場面において性格がとりあげられることは多く、心理学の分野においても性格については多岐にわたる研究が行われてきた。その中で、性格特性をBig Fiveとよばれる5つの特性によって包括的に把握しようとする、いわゆる5因子モデルに関する研究が盛ん

に行われてきた。Piedmont, McCrae & Costa (1991) は Big Five を N (Neuroticism), E (Extraversion), O (Openness to Experience), A (Agreeableness), C (Conscientiousness) の 5 特性であるとしている。

先行研究では、抑うつ性が低い群の方が外向性が高いこと (塗師, 2003) や、対人恐怖に関連する測定尺度では一貫して外向性と負の関連、神経症傾向と正の関連が見られている (清水ら, 2008) ことなどが示されている。このことから、性格特性は日常生活のみならず、病理的な側面まで幅広く関連している重要なものであることが窺える。

なお、本研究では和田 (1996) に従い、5 つの性格特性を情緒不安定性 (Neuroticism), 外向性 (Extraversion), 開放性 (Openness to Experience), 調和性 (Agreeableness), 誠実性 (Conscientiousness) から捉えることとする。

4. 児童期の家庭における食事場面と現在の性格特性との関連
子どもたちにとっては、愛情のこもったものを食べ、楽しく会話などをしながら食事をするることによって、豊かな感情や情操がはぐくまれてくる (藤江, 1989)。また、室田 (2004) は家庭における食事場面は毎回同じような顔ぶれで、同じような雰囲気のコミュニケーションを交わし、そしてそれは何年も続くものであるため、日々交わされる食卓の人間関係によって子どもたちの人格形成は大きく影響されると述べている。

先行研究では、梅澤ら (2010) によって幼少期からの食生活と青年期の性格特性には関連があることが明らかにされている。また、岡本・田口 (1997) の研究によっても子ども期に健全な食事状況にあった者はそうでなかった者に比べ、積極的に心理的にも安定した性格の特徴をもつようになることが明らかとなっている。

先述したように、食事場面は単に栄養摂取や食欲を満たすための場だけではなく、コミュニケーションや安らぎの場でもある。しかし、これまでの研究では食習慣や食事内容といった側面を中心に、肥満や疾病の原因として食と性格に着目して検討されたものや、過食などの食行動の問題と性格との関連について検討されているものが多く、食事場面での会話や雰囲気といった側面と性格特性との関連についてはあまり検討がなされていない。

5. 目 的

よって本研究では、大学生の回想する児童期の家庭における食事場面と、現在の性格特性との関連を明らかにすることを目的とする。なお食事場面については、食事相手、会話内容、会話頻度、雰囲気および食事への配慮といった観点から捉えることとする。

Ⅱ 方 法

1. 予備調査

大学生の回想する児童期の家庭における食事場面での会話内容を捉えることを目的とする予備調査を行った。

1) 調査時期：2011 年 7 月。

2) 調査対象：A 県の国立大学学部生 26 名 (男性 5 名、女性 21 名、平均年齢 20.96 歳、 $SD=0.72$)。

3) 調査内容

(1) フェイスシート：性別、年齢を尋ねた。

(2) 会話内容に関する質問：小学校時代の夕食を想起して回答するよう指示を与え、「食事場面においてどのようなやりとり、会話が行われていましたか。」という問いに対して自由記述で回答を求めた。

4) 結果

自由記述をもとに、臨床心理学を専攻する大学院生 3 名と筆者で項目の整理、統合を行った。その結果、22 項目が選出された (Table 1)。また、臨床心理学を専攻する大学院生 3 名と筆者で項目の妥当性を検討した結果、全ての項目において妥当性が確認された。

Table 1
予備調査によって選出された項目

- | |
|--------------------------------------|
| 1. その日の出来事を話していた |
| 2. 食事の作法について注意されていた |
| 3. 食事中に見ているテレビ番組について話していた |
| 4. その日学校であったことを話していた |
| 5. 家族が仕事の話をしていた |
| 6. その日あったことに限らず学校での出来事を話していた |
| 7. 食事中の姿勢について注意されていた |
| 8. 友人の話をしていた |
| 9. おかわりを頼んでいた |
| 10. アニメ・ゲーム・漫画等、自分の関心のあることについて話をしていた |
| 11. 両親が喧嘩していた |
| 12. はしの使い方について注意されていた |
| 13. 家族が自分には理解できない話をしていた |
| 14. テレビを消すように言われていた |
| 15. 自分が会話にはいることはあまりなかった |
| 16. 食べ方について注意されていた |
| 17. おかずを分け合っていた |
| 18. テレビがついているが話さなかった |
| 19. その日の夕飯について話していた |
| 20. 好き嫌いについて注意されていた |
| 21. 家族が自分以外の家族にかかりきりであった |
| 22. 学校での出来事について聞かれた |

2. 本調査

- 1) 調査時期：2011 年 11 月。
- 2) 調査対象：A 県の国立大学学部生 364 名。そのうち回答に不備のあるものを除いた 327 名（男性 134 名、女性 193 名、平均年齢 20.94 歳、 $SD=1.29$ ）を分析対象とした。

3) 調査内容

- (1) フェイスシート：性別、学部・学年、年齢、小学校時代の家族構成を尋ねた。

(2) 食事場面に関する質問

児童期の家庭における食事場面（夕食）を想起して回答するよう教示を与えた。また、既存の項目については、適宜文末や表現を過去の食事について問う形に変えて使用した。

A. 食事相手

「一人きりで食事をするが多かった」、「子どもだけで食事をするが多かった」、「父親と一緒に食事をするが多かった」、「母親と一緒に食事をするが多かった」、「家族の誰かと一緒に食事をするが多かった」、「家族全員で食事をするが多かった」の 6 項目、5 件法。

B. 食事場면을構成する要素

- a. 会話内容：予備調査で選出した項目、計 22 項目、5 件法。
- b. 会話頻度：平井・岡本（2003）の「子どもの食事場面の会話特徴に関する項目」のうち「食事の時、父とよく話す」、「食事の時、母とよく話す」、「食事の時、家族で楽しく話をする」の 3 項目に「食事の時、自分以外の家族はよく話していた」、「食事の時、家族の誰かとよく話していた」の 2 項目を加えた計 6 項目、6 件法。
- c. 雰囲気：大野ら（1984）の「家庭のイメージ調査

項目」を用いた。「暗い－明るい」、「不活発な－活動的な」、「きゅうくつな－自由な」、「対立的な－協力的な」、「頼りにならない－頼りになる」、「不満足な－満足な」の計 6 項目。SD 法による 7 段階評定。

- d. 食事への配慮：大野ら（1984）の「食事時のコミュニケーションを促進する諸条件」のうち、「食卓をきれいにしている（衛生的である）」などの衛生的配慮 2 項目、「食事の副食（栄養）を考えて作っている」などの栄養的配慮 2 項目、「子どもの好みを考えて料理をしてくれる」などの愛情的配慮 3 項目の計 7 項目、6 件法。

(3) 性格特性に関する質問

和田（1996）の Big Five 尺度を用いた。情緒不安定性因子、外向性因子、開放性因子、調和性因子、誠実性因子の 5 因子で構成されており、各因子 12 項目の計 60 項目、7 件法。

Ⅲ 結 果

1. 大学生の回想する児童期の家庭における食事場面での会話内容の因子分析

予備調査から選出した 22 項目について、フロア効果・天井効果が確認された 8 項目を除く 14 項目で最尤法による因子分析を行った。因子数は、固有値 1 以上の基準を設け、スクリープロットによる固有値の減衰状況を考慮して 2 因子とし、プロマックス回転を行った。因子負荷量が .35 に満たなかった項目と 2 つ以上の因子に対して因子負荷量が高かった計 4 項目を削除し、再度因子分析を行った。結果と因子間相関を Table 2 に示す。

第 1 因子は「食べ方について注意されていた」など食事のマナーに関する注意で構成されているため「食事のマナーに関する注意」（ $\alpha=.82$ ）とした。第 2 因子は「友

Table 2
会話内容に関する項目の因子分析結果

第 1 因子：食事のマナーに関する注意 ($\alpha=.82$)	第 1 因子	第 2 因子
1. 食べ方について注意されていた	.88	-.12
2. 食事中の姿勢について注意されていた	.79	.05
3. 食事の作法について注意されていた	.77	.06
4. はしの使い方について注意されていた	.71	-.02
5. 好き嫌いについて注意されていた	.38	.13
第 2 因子：日常の出来事に関する話題 ($\alpha=.71$)	第 1 因子	第 2 因子
6. 友人の話をしていた	-.02	.86
7. その日あったことに限らず学校での出来事を話していた	-.01	.82
8. 学校での出来事について聞かれた	.03	.57
9. アニメ・ゲーム・漫画等、自分の関心のあることについて話をしていた	-.02	.55
10. その日の夕飯について話していた	.22	.38
	因子間相関	.31

Table 3
食事場면을構成する要素と性格特性の平均・標準偏差及び相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	情緒不安定性	外向性	開放性	調和性	誠実性
			<i>r</i>	<i>r</i>	<i>r</i>	<i>r</i>	<i>r</i>
1. 食事のマナーに関する注意	18.31	3.69	.04	.09	.03	-.03	-.02
2. 日常の出来事に関する話題	35.21	6.77	-.06	.36**	.16**	.17**	.24**
3. 会話頻度	18.34	3.54	-.18**	.28**	.12*	.23**	.24**
4. 雰囲気	31.16	7.46	-.10	.26***	.11*	.13*	.12*
5. 食事への配慮	35.66	4.65	-.10	.27**	.12*	.21**	.21**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

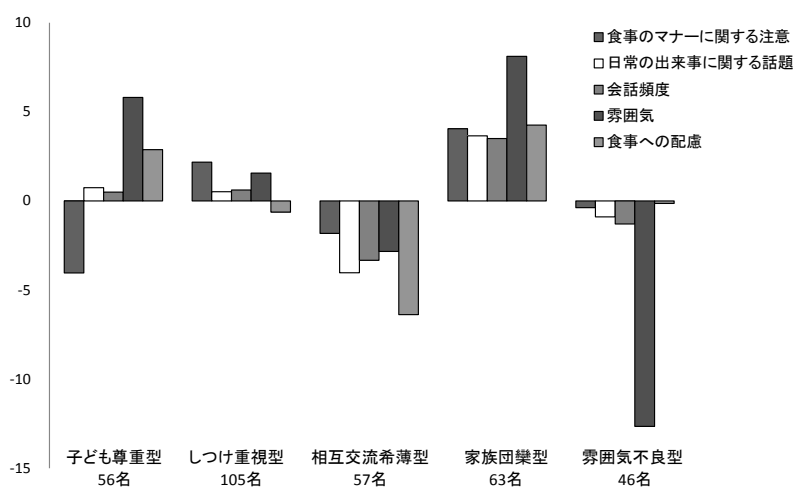


Fig.1 食事場면을構成する要素による食事場面タイプの分類

人の話をしていた」など、日常の出来事に関する幅広い話題が含まれているため、「日常の出来事に関する話題」($\alpha=.71$)とした。作成した尺度については、因子や項目を考慮した上で「大学生の回想する児童期の家庭における食事場面での会話内容尺度」(以下“会話内容尺度”)と命名した。なお、先行研究において類似した尺度はなく、臨床心理学を専攻する大学院生3名と筆者で項目の妥当性を検討した結果、この尺度の妥当性が確認された。

2. 食事相手および食事場면을構成する要素と性格特性との関連

1) 食事相手と性格特性との関連

食事相手の各項目と性格特性との関連を検討するため、相関分析を行った。その結果、食事相手の各項目と性格特性との間に有意な相関はみられなかった。

2) 食事場면을構成する要素と性格特性との関連

会話内容と性格特性との関連を検討するため、会話内容尺度の各因子の得点と性格特性との相関分析を行った。その結果、「日常の出来事に関する話題」と外向性

($r=.36$, $p<.01$), 誠実性 ($r=.24$, $p<.01$) との間に有意な弱い正の相関がみられた。

また、会話頻度、雰囲気、食事への配慮と性格特性との関連を検討するため、相関分析を行った。その結果、会話頻度と外向性 ($r=.28$, $p<.01$), 調和性 ($r=.23$, $p<.01$), 誠実性 ($r=.24$, $p<.01$) との間、雰囲気と外向性との間 ($r=.26$, $p<.001$), 食事への配慮と外向性 ($r=.27$, $p<.01$), 調和性 ($r=.21$, $p<.01$), 誠実性 ($r=.21$, $p<.01$) との間にそれぞれ有意な弱い正の相関がみられた。相関分析の結果を Table 3 に示す。

3. 食事場면을構成する要素による食事場面タイプの分類

会話内容尺度の各因子および会話頻度、雰囲気、食事への配慮の各々の合計得点を用いて Ward 法によるクラス分析を行い、5つのクラスタを得た。第1クラスタから第5クラスタまで順に、56名、105名、57名、63名、46名の調査対象が含まれていた。 χ^2 検定を行った結果、有意な人数比率の偏りが見られた ($\chi^2_{(4)}=32.25$, $p<.001$) (Fig.1)。

各クラスタの特徴を考慮し、第1クラスタを「子ども尊重型」、第2クラスタを「しつけ重視型」、第3クラスタを「相互交流希薄型」、第4クラスタを「家族団欒型」、第5クラスタを「雰囲気不良型」とした。各クラスタの特徴に関しては考察において記述する。

4. 食事場面タイプによる性格特性の違い

5つの食事場面タイプによる性格特性の得点の違いを検討するため、各食事場面タイプを独立変数、各性格特性を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、情緒不安定性においては有意差がみられなかったが ($F_{(4,322)}=0.30, n.s.$)、外向性 ($F_{(4,322)}=8.51, p<.001$)、開放性 ($F_{(4,322)}=2.64, p<.05$)、調和性 ($F_{(4,322)}=3.54, p<.01$)、誠実性 ($F_{(4,322)}=3.98, p<.01$) において有意な差がみられた。Tukey法による多重比較の結果、外向性については「子ども尊重型」、「しつけ重視型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも0.1%水準で、また「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「雰囲気不良型」よりも5%水準で有意に高かった (Fig.2)。開放性については「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも5%水準で有意に高く (Fig.3)、調和性については「子ども尊重型」が「しつけ重視型」よりも5%水準で有意

に高かった (Fig.4)。また、誠実性は「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも5%水準で有意に高かった (Fig.5)。

IV 考 察

1. 大学生の回想する児童期の家庭における食事場面での会話内容の因子分析

予備調査の結果をもとに、2因子からなる「大学生の回想する児童期の家庭における食事場面での会話内容尺度」が作成された。

第1因子「食事のマナーに関する注意」は、食事面に特有の項目で構成されている。大学生にとっては、食事のマナーについて教えられたり注意されたりすることが児童期の食事場面の会話の中で大きな位置を占めており、印象に残りやすかったといえるだろう。

第2因子「日常の出来事に関する話題」は、友人や学校、自分の関心のあることなど日常の出来事に関する幅広い話題が含まれている。食事場面においては特定の話題だけが話されるのではなく、多様な話題が取り上げられ、会話が広がっていたと推測される。

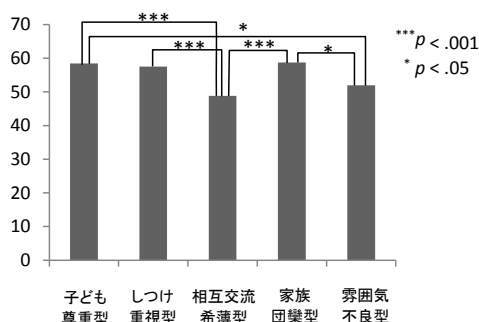


Fig.2 食事場面タイプによる外向性の違い

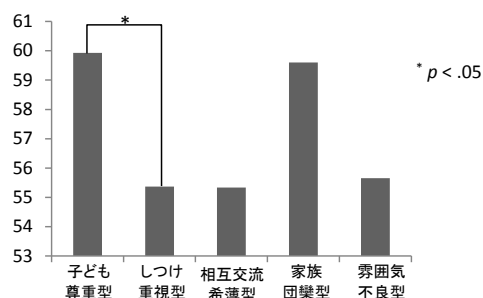


Fig.4 食事場面タイプによる調和性の違い

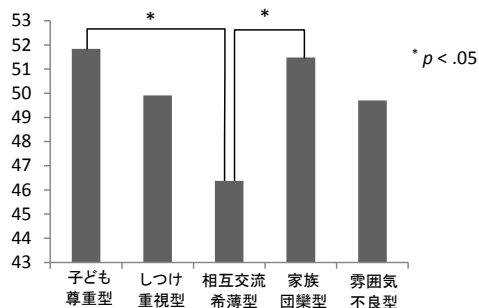


Fig.3 食事場面タイプによる開放性の違い

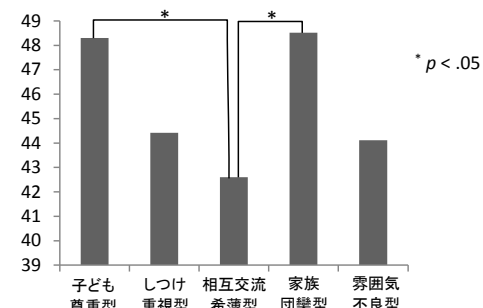


Fig.5 食事場面タイプによる誠実性の違い

2. 食事相手および食事場면을構成する要素と性格特性との関連

1) 食事相手と性格特性との関連

食事相手と性格特性との関連は低いことが示された。藤江（1989）の研究結果では、好ましくない食習慣のグループは情緒不安定、社会的不適応性の傾向が強いことが示されており、好ましくない食習慣の一つとして食事を一緒にする機会の少ないものが挙げられている。このことから、食事相手が他の要素に影響を与えることで間接的に性格特性と関連している可能性も考えられる。

また、本研究においては一人きりや子どもだけで食事をする頻度の得点が低く、父親、母親、家族の誰か、家族全員で食事をする頻度の得点が高いデータが多かった。このことが食事相手と性格特性との関連の低さに影響している可能性も考慮する必要がある。

2) 食事場면을構成する要素と性格特性との関連

(1) 会話内容と性格特性との関連

「食事のマナーに関する注意」と性格特性は関連が低いことが示された。「食事のマナーに関する注意」は食事場面に特有の話題であり想起されやすいものの、注意される口調や雰囲気等、他の要因も関わるため、性格特性との直接的な関連は低くなったと考えられる。

また、「日常の出来事に関する話題」と外向性、誠実性との間には関連がみられた。元来外向的な性格である場合、積極的に周囲に働きかけるが多かったと考えられる。さらに、誠実性の高さが示す性質の一つには勤勉性があり（John, 1990）、様々なことに一生懸命取り組むことで家族に話したい話題が増えていたと予想される。つまり、もとより外向性や誠実性が高い場合には子ども自身が提供する話題が豊富にあったと考えられる。また、家族が自分の話を聴き、認めてくれていると感じることで、色々なことに挑戦する意欲も高まると考えられる。これらのことが毎日の食事場面の中で繰り返されることで、外向性や誠実性の形成に繋がった可能性が示唆される。

(2) 会話頻度と性格特性との関連

会話頻度と外向性、調和性、誠実性との間には関連がみられた。外向性が高い場合は社交的、外向的であり（村上・村上, 2004）調和性の高さは向社会的行動も意味する（John, 1990）。子どもの外向性や調和性が高い場合、家族に対して積極的にはたらきかけ、自ら活発に会話を行っていた可能性が考えられる。また、活発な会話を通して、人との関わりを楽しむことが外向性や調和性の形成へと発展した可能性もある。食事場面での会話を通じた関わりの中で、家族の外向性や調和性、誠実性に触れ、それを模倣・同一化することが、子どもの外向性や調和性、誠実性の形成に結びつく場合もあるだろう。

(3) 雰囲気と性格特性との関連

雰囲気と外向性との間に関連がみられた。外向性が高い場合、食事場面でも家族と積極的に関わろうとし、そのために雰囲気がよくなっていた可能性がある。また、緊張感の少ない穏やかな雰囲気の食事場面が絆や愛着など親子の関係性の強さと関連することが示唆されており（平井・岡本, 2003）、食事場面の雰囲気の良さは親子関係、ひいてはその後の対人関係に関連すると考えられる。良好な雰囲気の中で食事を媒介とした様々な体験を家族と共有することが、積極的に社交的な性格形成のきっかけとなりうると考えられる。

(4) 食事への配慮と性格特性との関連

食事への配慮と外向性、調和性、誠実性との間に関連がみられた。外向性や調和性の持つ他人の感情を敏感に察して相手の立場で考えるという性質（村上・村上, 2004）を持ち合わせている場合、食事に込められた配慮や愛情に関心を向け、それらを敏感に感じ取ることができると考えられる。また、食事への配慮から食事を介在させた愛情や思いやりを感じることで、積極的に働きかける活力や他者のことを考えるゆとりなどが生まれると考えられる。その結果、外向性や調和性、誠実性の持つ勤勉性や実行力（John, 1990; McCare & John, 1992）などの形成に結びついたと考えられる。

3. 食事場면을構成する要素による食事場面タイプの分類

クラスタ分析によって「子ども尊重型」、「しつけ重視型」、「相互交流希薄型」、「家族団欒型」、「雰囲気不良型」の5つの食事場面タイプが得られた。

「子ども尊重型」は、「食事のマナーに関する注意」の得点が低く、雰囲気の得点が高い。食事場面で注意されることが少なかったため、「日常の出来事に関する話題」や会話頻度の得点がさほど高くはないにも関わらず雰囲気がよいと捉えたと考えられる。さらに食事への配慮の得点の高さからも、子どもが尊重されていた食事場面であったことが窺える。

「しつけ重視型」は、「日常の出来事に関する話題」や会話頻度の得点と比べ「食事のマナーに関する注意」の得点が高く、子どもにとってしつけの多い食事場面であったと考えられる。後藤ら（2009）の研究では、過去の食事場면을悪かったと感じた要因について、「食事＝説教だった」と記述した者もいたと述べられている。しかし、この型では雰囲気の得点も平均を上回っていることから食事が説教の場であったというようなネガティブな想起のされ方のみではないと考えられる。

「相互交流希薄型」は食事場면을構成する要素の得点がすべて平均を下回り、会話頻度の得点その他の型と比べて最も低い。さらに、雰囲気や食事への配慮の得点も平均を下回ることから、言語的・非言語的なコミュニ

ケーションが共に希薄であったと考えられる。

「家族団欒型」は、会話に関する項目の得点が高いことから、家族の双方向的な言語的コミュニケーションが活発に行われていたと考えられる。さらに、雰囲気の出点の高さからコミュニケーションが食事場面の雰囲気を活性化させていたと推察される。これらのことから、この型では食事場面が家族団欒の場となっていたと考えられる。

「雰囲気不良型」は雰囲気の出点の低さが特徴的である。食事場面の雰囲気は、様々な側面が全体的に関連して生じる要因であると考えられ、本研究で捉えた要素以外の要因が雰囲気に対するネガティブな認知に関係している可能性も考慮する必要がある。

また、5つの食事場面タイプの中で「しつけ重視型」の人数が最も多かった。このことから、食事場面が持つ食事の大切さや食文化、食事の作法を保護者から子どもへ伝える場（森脇ら、2007）としての役割を重視している家庭が多いと考えられる。また、その他に大きな人数比の偏りが見られなかったという結果は、以前は食卓＝団欒であったが、現代ではその場が減少傾向にあるという柳澤・河村（2006）の知見を指示するものといえる。

4. 食事場面タイプによる性格特性の違い

(1) 食事場面タイプによる情緒不安定性の違い

情緒不安定性においては食事場面タイプによる違いがみられなかった。情緒不安定性は“不安”や“傷つきやすさ”に代表される性質を持つ（McCare & John, 1992）。「基本的信頼感」は抑うつ傾向や特性不安と高い相関をもつ（田名場ら、2000）ことから、情緒不安定性の形成には基本的信頼感の獲得等、乳幼児期における心理的発達の影響が大きい可能性がある。同時に、情緒不安定性と自我の確立との間にはかなり高い相関があることが分かっている（田中、1996）。自我同一性の確立はE.H. エリクソンによって提唱された青年期の心理発達課題である。今回の調査対象は青年期後期にあたる大学生であるため、児童期から調査時期までの自我同一性の確立によって情緒不安定性の得点に変化する可能性がある。このように情緒不安定性の形成には児童期以外の心理的発達の影響が大きいいため、児童期の食事場面タイプによる違いはみられなかったと考えられる。

また、杉浦・高梨（2002）の研究によると、食事を摂った場合は食事を摂らなかった場合と比べ、より低い緊張・抑うつ、怒り・敵意、および疲労を体験していたとされている。不安や緊張が高い（村上・村上、2004）とされる情緒不安定性は、食事の摂り方や栄養バランス等の側面と関連が高いため、本研究では違いがみられなかった可能性が考えられる。

(2) 食事場面タイプによる外向性の違い

「子ども尊重型」、「しつけ重視型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも、また「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「雰囲気不良型」よりも外向性が高いという結果が示された。相対的に見て「日常の出来事に関する話題」、会話頻度、食事への配慮の得点が全て高い型の方が外向性が高い。共に食事をするを通じたコミュニケーションという人間の基本的な欲求が満たされると同時に、心の充足が感じられることで、食や社会への関心が高まり（中川ら、2010）、積極的な態度の形成のきっかけになりうると考えられる。

(3) 食事場面タイプによる開放性の違い

「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも開放性が高いという結果が示された。「子ども尊重型」、「家族団欒型」と「相互交流希薄型」の間で得点差が大きいのは雰囲気と食事への配慮である。食事場面で向かい合わせる顔は、身体の中でも内臓機能と強く関連しており、表情や感情、言語に影響を及ぼすことが指摘されている（西原、2002）。つまり、食べるという行為を通じて顔の表情や言葉も活性化されるといえる。このことから、食事場面では食事への配慮を感じることで雰囲気もよくなり、配慮が感じられる食事をとることで、表情や会話が活性化されて雰囲気がよくなるという相互作用がおけると考えられる。食事場面を構成する各要素はどれも開放性との関連が低かったことから、この雰囲気と食事への配慮の相互作用が開放性の高さに関係していると推察される。

また、西野・丹尾（2009）によると、「団欒」には心理的な親近感があり、基本的な安心感や帰属感を得ることができると考えられる。雰囲気と食事への配慮の相互作用が団欒へと繋がり、団欒を通して得られた安心感や帰属感などが、開放性の持つ柔軟性や心の広さという性質の基盤となった可能性も考えられる。

(4) 食事場面タイプによる調和性の違い

「子ども尊重型」が「しつけ重視型」よりも調和性が高かった。「子ども尊重型」と「しつけ重視型」においては「食事のマナーに関する注意」と食事への配慮の得点の一方が平均より高く、一方が平均より低くなっている。先にも述べたように、食事への配慮は食事を用意する人の愛情や思いやりの表れである。「食事のマナーに関する注意」も話題を提供する者の愛情の表れであると考えられるが、児童期の子どものためには「叱られている」、「注意されている」と捉えられやすいと考えられる。自分が尊重され、他者から思いやりや愛情を感じること、他者に対する思いやりや愛情を持ちやすくなると考えられる。また、そこから心の余裕も生まれて、調和性の包含する“我慢”、“受容”などの性質（Antonionin, 1998）を持ちやすくなったのではないかと推察される。

(5) 食事場面タイプによる誠実性の違い

誠実性は、「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも得点が高いという結果が示された。「日常の出来事に関する話題」、会話頻度、食事への配慮、雰囲気の評価をみると、「子ども尊重型」、「家族団欒型」が「相互交流希薄型」よりも高いことが分かる。「日常の出来事に関する話題」、会話頻度、食事への配慮と誠実性との間には関連がみられており、これらに良好な雰囲気が加わると誠実性との関連がより高まると考えられる。

会話頻度が高いということは、自分の発言を受け止め、応答してもらえる機会が多いということであり、そこに雰囲気の良さが加わることで、より自分を受け入れてもらっているという感覚を抱きやすくなると考えられる。室田（2009）によると、無条件の全面的な受容を無限大に受ける感覚が、心の力のもとになっている。そのため、会話や食事への配慮を通して愛情や被受容感を感じることが子どもの日々の活力に繋がり、何事にも積極的にとりくむ（村上・村上，2004）等、誠実性の持つ性質と関連したのではないかと考えられる。

V まとめと今後の課題

1. まとめ

(1) 本研究においては、まず予備調査によって選出された項目を因子分析し、「食事のマナーに関する注意」と「日常の出来事に関する話題」の2因子からなる「大学生の回想する児童期の家庭における食事場面での会話内容尺度」を作成した。

(2) 大学生の回想する児童期の家庭における食事場面と現在の性格特性との関連は次のとおりであった。①食事相手や食事場면을構成する要素と性格特性との関連を検討した結果、「日常の出来事に関する話題」、会話頻度、雰囲気、食事への配慮と性格特性との間に関連が見られた。②食事場面タイプによる性格特性の違いを検討した結果、外向性、開放性、調和性、誠実性においては食事場面タイプによる違いがみられた。

(3) これらの結果から、児童期の食事場面では、家族から食事のマナーに関する注意を受けていたこと、日に応じて多様な話題が取り上げられていたことが想起されやすいと推測される。中でも「日常の出来事に関する話題」は性格特性との関連がみられており、食事場面で様々な話をすることの重要性が窺える。

また、食事場面での会話や雰囲気、食事への配慮といった側面が人々の心理的側面に関連している可能性が示唆された。さらに、食事場면을構成する要素と性格特性との関連は低いが、食事場面タイプに分類した場合には性格特性に違いがみられたという結果が得られた。こ

れより、食事場面は様々な要素の相互作用によって心理的側面との関連が高まりやすいと考えられる。このように、毎日繰り返される食事場面は身体的側面だけではなく、性格特性をはじめとした心理的側面にとっても重要な要因となっていると考えられる。児童期の終わりから10年程の年月を経た大学生においても、想起された当時の食事場面と現在の性格特性との間に関連がみられたことは、児童期の食事場面における会話や雰囲気、食事への配慮といった側面の重要性を示しているといえよう。

2. 今後の課題

(1) 本研究においては時期や食事を非常に限定して調査を行ったため、家庭における食事場面のごく僅かな部分しか捉えることができていない。今後は、調査対象や食事場面に対する視点を変えて検討するなど、研究の幅の拡大が必要である。

(2) また、家庭における食事場面は家族の職業や生活習慣などの影響を受ける可能性が高いため、調査対象の偏りをなくした上で再検討する必要があるだろう。

(3) さらに、家庭における食事場面には家庭内の人間関係等、量的な調査だけでは捉えきれない側面が反映されていると考えられる。食事場面が家庭においてどのような側面を反映したものであるのかを捉えていくことも今後の大きな課題である。

謝 辞

本論文は、平成23年度九州大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。卒業論文作成にあたりご指導を頂きました、跡見学園女子大学人文科学研究科教授野島一彦先生に厚く感謝を申し上げます。ならびに、お忙しい中丁寧にご指導を賜りました九州大学大学院人間環境学府教授 福留留美先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Antonioni, D. (1998). Relationship between the big five personality factors and conflict management styles. *The International Journal of Conflict Management*, 9, 336-355.
- 藤江奏 (1989). 食習慣と性格特性との関連. 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 23(2), 1-12.
- 後藤紀子・矢澤久史・大澤香織 (2009). 小児・児童期における家庭の食事環境がその後の親子関係に及ぼす影響. 東海学院大学紀要, 3, 119-124.
- 平井滋野・岡本祐子 (2003). 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連. 青年心理学研究, 15, 33-49.

- 飯塚由美 (2009). 食の記憶の社会的背景Ⅱ－自伝的記憶にみる食事場面の状況分析と対人的要因－. 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, **47**, 1-8.
- 飯塚由美・松川順子 (2008). 食の記憶の社会的背景Ⅰ－印象に残る食事場面の記憶とイメージ評価－. 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, **46**, 35-43.
- 生野照子 (2001). 「食」と心の働き－小児期を中心として. 食の科学 **277**, 22-28.
- John, O. P. (1990). The "Big Five" factor taxonomy: Dimensions of personality in the natural language and in questionnaires. In L. A. Pervin (Ed), *Handbook of personality: Theory and research*. New York: The Guilford Press, pp66-100.
- McCare, R. R. & John, O. P. (1992). An introduction to the five-factor model and its applications. *Journal of Personality*, **60**, 175-215.
- 森脇弘子・岸田典子・上村芳枝・竹田範子・佐久間章子・寺岡千恵子・梯正之 (2007). 女子学生の健康状況・生活習慣・食生活と小学生時の食事の楽しい会話との関連. 日本家政学会誌, **58**(6), 327-336.
- 村上宣寛・村上千恵 (2004). 臨床心理アセスメントハンドブック. 北大路書房, pp.110-111.
- 室田洋子 (2004). こっち向いてよ－食卓の絵が伝える子供の心－. 幸書房, pp.74-77.
- 室田洋子 (2009). 「食卓の力」で子どもが変わった！ いっしょに食べて心を育てる. 株式会社カンゼン, pp.52-53.
- 中川李子・長塚未来・西山未真・吉田義明 (2010). 共食の機能と可能性－食育をより有効なものとするための一考察－. 食と緑の科学, **64**, 55-65.
- 西原克成 (2002). 内臓が生み出す心. 日本放送出版協会, pp.164-165, 170-174.
- 西野美佐子・丹尾しのぶ (2009). 食事場面の家族画からみた親子の心理的結合性の変化. 日本教育心理学会総会発表論文集, **51**, 423.
- 塗師斌 (2003). 性格特性の Big Five の性差と抑うつ. 横浜国立大学教育人間科学部紀要, **I**, 教育科学, **5**, 1-10.
- 岡本洋子・田口田鶴子 (1997). 子ども期の食事がその後の味覚感受性や性格特性に及ぼす影響. 日本家政学会誌, **48**(7), 621-631.
- 大野敦子・佐藤夏生・手島茂樹 (1984). 食事行動の研究 (Ⅳ)－食事行動とパーソナリティ形成との関連についての一考察 (2)－. 国際学院埼玉短期大学研究紀要, **5**, 13-19.
- 大谷貴美子・中北理映・饗庭照美・康薔薇・富田圭子・南出隆久 (2003). 家庭における食生活体験や親の関わり方が青年期後期の自己独立性に及ぼす影響. 日本食生活学会誌, **14**, 14-27.
- Piedmont, R.L., McCare, R. R. & Costa, P.T. (1991). Adjective check list scales and the Five-factor model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**(4), 630-637.
- 清水健司・河邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連. パーソナリティ研究, **16**(3), 350-362.
- 杉浦京子・高梨利恵子 (2002). 食事摂取が精神活動に及ぼす影響. 日本医科大学基礎科学紀要, **32**, 33-40.
- 田名場美雪・佐々木大輔・佐藤清子 (2000). 青年期における基本的信頼感と対人関係. 弘前大学保健管理概要 **21**, 11-15.
- 田中正 (1996). 青年期女子における性格と自我確立との関連. 名古屋文理短期大学紀要, **21**, 19-22.
- 辻本洋子・奥田豊子 (2009). 小学生の楽しく食べることと食生活・生活習慣との関連性. 大阪教育大学紀要, 第Ⅱ部門, **57**(2), 49-60.
- 梅澤敦子・佐藤亜沙美・木谷信子・長谷川めぐみ・古崎和代・森谷梨 (2010). 女子学生の幼少期からの食生活と青年期の性格特性. 天使大学紀要, **10**, 43-55.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. 心理学研究, **67**, 61-67.
- 柳澤和泉・河村敦 (2006). 摂食障害と養育態度との関連性. くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要, **39**(2), 79-97.